

湖心亭のお茶

私の若き日の愛読書の一つに「三国志」がある。10巻に及ぶ中国歴史小説を一気に読んだことを記憶している。主人公の若き青年が母に美味しいお茶を飲んでもらおうと、お茶を求めて旅に出たところから始まっていた。文面からして、その頃の中国では如何にお茶が貴重品であったかが伺い知れる。

上海の宿泊するホテルから徒歩で15分ほどの所に豫園^{よえん}はあった。この庭園は明代の1577年に19年の歳月をかけて造られた私庭園で、当時は5万㎡の式面積もある立派なものであった。

その入口に140年の歴史を持つ上海で最も古い茶楼「湖心亭」が目を引いた。その名の如く池の真ん中に九曲橋が懸っている中央に、伝統的で古式豊かな屋根が反り返った江南様式の楼閣が建っていた。中に入ると23種類の中国茶と伝統菓子を食べさせてくれる。

中国の広大な大地には各地で独特の優れたお茶を作り出している。それぞれが恵まれた気候、風土、環境を持っている。その数は一千種類を超えるというから驚きだ。これらは色や発酵の度合いによって6つ（緑茶、紅茶、黒茶、青茶、白茶、黄茶）に分けられる。しかしこれとは別に私が最も興味を持ったのは花茶であった。湯呑の中に様々な花が入っておりその美しさと香りは、日本ではなかなか味わえない素晴らしい中国の思い出の一つになった。撮影 2010年夏

